

2021年6月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北米やユーラシア大陸で波列パターンが卓越し、北米西部、ヨーロッパ北部～ロシア西部で顕著な正偏差となった。北極付近では極渦が平年より強かった。200hPa 風速をみると、ヨーロッパ付近で偏西風の分流が明瞭となった。ユーラシア大陸上では、亜熱帯ジェット気流、寒帯前線ジェット気流ともに蛇行が明瞭だった。海面気圧をみると、北極付近で負偏差、北大西洋中緯度帯～西シベリアで正偏差となり、アゾレス高気圧の勢力は平年より強かった。日本の南海上では、太平洋高気圧の西への張り出しが平年より弱かった。850hPa 気温をみると、北米西部、ヨーロッパ北部～ロシア西部、東シベリアで顕著な高温偏差、西シベリア、インドで低温偏差となった。

対流活動は、平年と比べて、スマトラ島の南、日本の南海上、メキシコ西岸～メキシコ湾、大西洋赤道域で活発、アラビア海～インドシナ半島～フィリピンの東、太平洋赤道域で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、上中旬は不明瞭だったが、下旬は大西洋からインド洋西部を東進した。対流圏上層では、ユーラシア大陸南部～日本の東海上で亜熱帯ジェット気流に沿った波列パターンが卓越し、中国、日本の東海上で高気圧性循環偏差が明瞭だった。対流圏下層では、日本の南海上で低気圧性循環偏差となったほか、インド洋赤道域の中部～東部、大西洋熱帯域

では、南北半球対の低気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、インド洋～太平洋で正偏差、大西洋で負偏差となった。南方振動指数は+0.8だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.26℃（速報値）であった。6月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.71℃/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

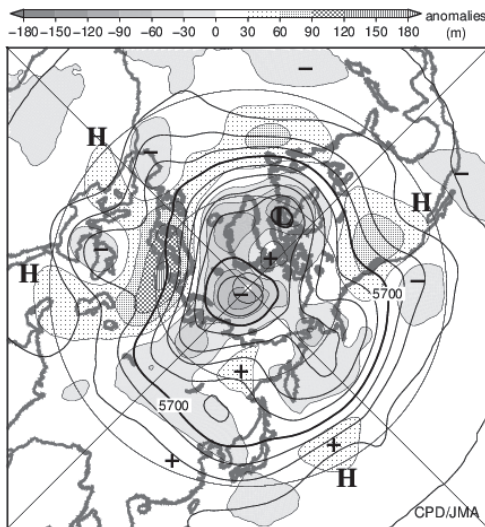
- 東シベリア北西部～中央シベリア東部、中央アジア南部～中東北部、ロシア西部～ヨーロッパ中部、カナダ南西部～米国北東部、ニュージーランド等で異常高温となった。
- 中央シベリア南東部及びその周辺、ロシア南西部～ヨーロッパ南東部、ヨーロッパ中部～北アフリカ北部、米国南東部～メキシコ南西部で異常多雨、西シベリア西部～ロシア西部、米国北東部・北部で異常少雨となった。

（気象庁 大気海洋部 気候情報課）

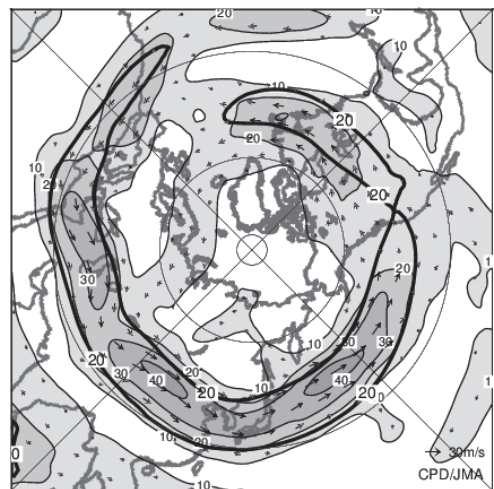
※ 前号以降、特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

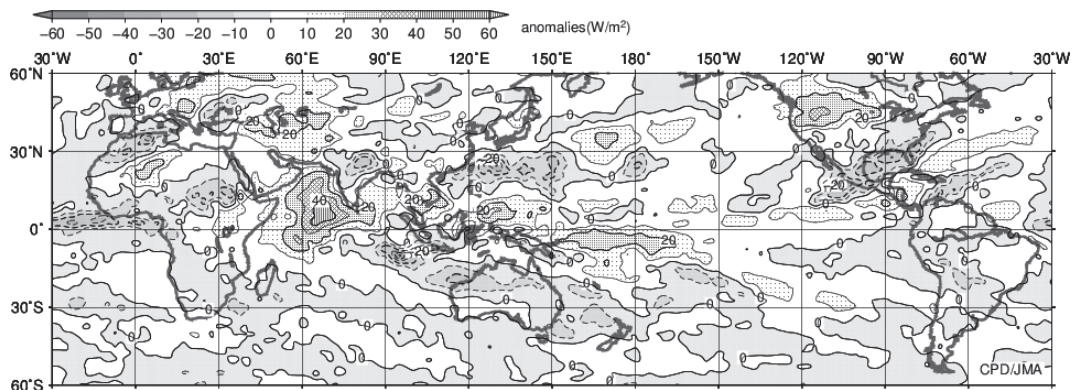
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2021年6月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

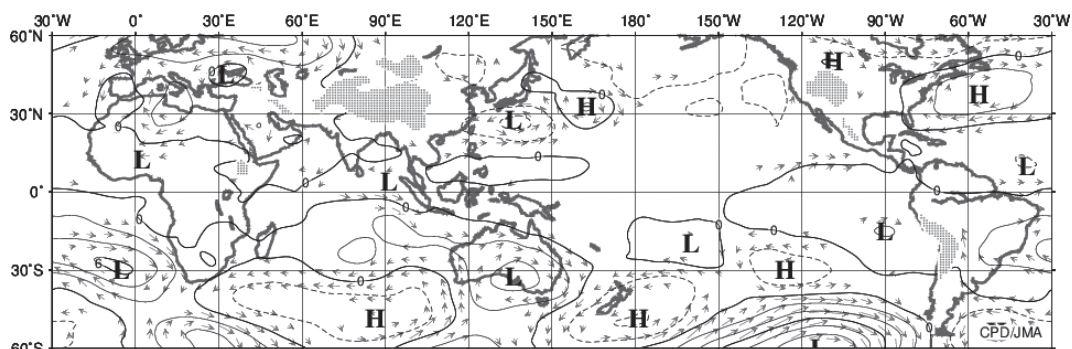


2021年6月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



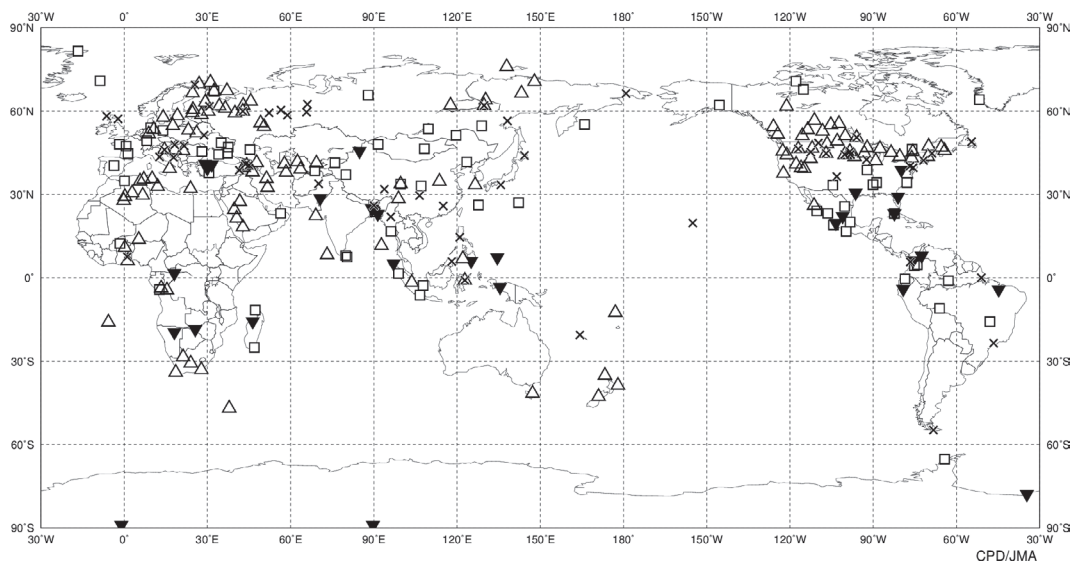
2021年6月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2021年6月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2021年6月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。